

板坂耀子編 『江戸温泉紀行』

久保田，啓一
有明工業高等専門学校講師

<https://doi.org/10.15017/11951>

出版情報：語文研究. 65, pp.64-64, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《紹介》

板坂耀子編『江戸温泉紀行』

久保田 啓 一

折から空前の温泉ブーム。誠に時機に投じた企画と言うべきか。歴大な近世紀行文の群れにほとんど独力で立ち向かい、方法と素材の両面から独自の分析を試み続けて来た編者が、温泉紀行という一ジャンルの、しかもごく限られた作品を対象にしたにすぎないとは言え、紀行の具体的な読み方を提示した点で学問的にも注目すべき一冊となっている。収めるところ以下の五編。狂歌師大根土成の滑稽本風『滑稽有馬紀行』、本居大平の療養生活の記録『有馬日記』、公務の合い間に湯治に向かう武士の思いをしる原正興の熱海箱根紀行『下匣両温泉路記』、湯治の失敗を率直に記した一方軒玄英『湯倉温泉紀行』、道中での友人達との詠歌にむしる重点のある坂本栄昌の草津紀行『旅のくちずさみ』。後注と解説には、まさに編者ならではの収録作品以外からの豊富な引用が縦横に利用され、温泉紀行の何たるかを読者に知らしめんとする努力を十全に感知できる。

例えば、温泉の湯治客を対象とした実用的な案内記の文章が、入浴の情景や己の肉体の観察までとり込みながら従来の雅文学には見られなかった新鮮な表現として温泉紀行に結実していくという見解、休暇をもらって湯治する武士が「治まれる御代」への賛辞を忘れないこと、留守宅への土産品物色にかなりの紙幅を割く例があること、江戸時代の旅行ガイドブック『旅行用心集』の四分の一を占めるのが「諸国温泉二百九十二ヶ所」で、温泉旅行が近世期におい

ても重要な存在であったことなど、興味深い指摘をいくつも挙げる
ことができるのである。

もっとも、これらは個別の作品に依りつつ温泉紀行の本質の一端を窺おうとする姿勢としては首肯されるものの、「江戸温泉紀行」なる文学の輪郭がこれで明確になったとは言いや難い憾みがお残る。

採られた五編は、おそらくこれに数倍する温泉紀行を読破したであろう編者の目に叶ったものである以上、他よりも優れた点を何処かに有しているはずである。読者としてはこれらの「名作」なる所以を是非とも聞かせていただきたいのである。解説中には「近世の紀行文の名作」「紀行の名著」といった表現が散見する。編者は何を以て「名作」と断じるのか、その基準を明らかにすることが近世紀行文を近世文学として読み研究するための指針の確立につながるであろうし、「どちらかという太陽気な明るさを持つのが普通であった」(解説)という温泉紀行の位置を見極めるのにも不可欠であると思いがいかがあるろう。「記事の豊富さ、平明な記述」(解説)が「名作」としての特徴「ならば、例えば「おくの細道」はどうなのか、といった素朴な疑問を禁じ得ないのである。

いかに困難であるかは百も承知であるが、現状では編者にしから求めることができないのであるから、いきおい期待も高まる。一日も早い紀行文研究提要の完成と、本集のような主要作品の本文提供を今後とも冀う次第である。

最後に一言。坂本栄昌は「旅のくちずさみ」冒頭に登場する津村涼庵とともに成島道筑の門弟で、二条派ではなく冷泉派の歌人である。

(昭和六十二年八月、平凡社東洋文庫、B6判、一三〇〇円)